

森のちやれんがニュース

2018 冬

Newsletter vol.14



第12回企画テーマ展

『りんご農家の道具』を開催 (2018年9月21日～11月25日)

北海道でのりんご栽培の歴史は、なんと150年ほどに及びます。この企画テーマ展では、2017年に札幌市南区から収集したりんご農家の道具の公開を中心に、北海道でのりんご栽培の歴史や、四季折々のりんご園での農作業の様子、歌や絵本などに利用されているりんごのすがたなどを切り口に、りんごの歴史と文化を紹介しました。

また、「未来のりんご!」としてぬりえの参加型展示を行いました。ここでは、札幌市厚別区内にある幼稚園の年長さん371名の協力のほか、来館者によるぬりえも随時展示しました。全部

で1,000枚を超える独創的なりんごが集まり、展示場を華やかに彩りました。

展示場では、昔の道具を懐かしんだり、家族で絵本やぬりえを楽しんだりする姿が多く見受けられました。

(研究職員 鈴木明世)



来館者によるぬりえスペースとりんごの顔出しパネル



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
身近な自然の多様性を語る植物標本
- ③ 総合展示室の資料紹介/第3テーマ
冬山造材を支えた道具「サツゲ」
- ④ 研究活動紹介
もう一つの歴史・文化の道—北海道から
千島列島、カムチャツカへ—
- ⑥ トピックス
はっけん広場のイベントで、秋を満喫！
ロシア、カナダの博物館との交流事業が
進行中です
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
アイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソ』
増刷します
- ⑧ 活動ダイアリー

収蔵資料紹介

身近な自然の多様性を語る植物標本

水島 未記

研究部自然研究グループ 学芸主幹

当館では、2016(平成28)年度から翌年度にかけて野幌森林公園産の植物標本約900点を受入・登録しました。これらは当館が行っている研究プロジェクト「野幌森林公園の生物インベントリー調査」による植物相調査で採集したものです。プロジェクトの目的はこの地域の生態系を形づくる生物種の総目録(インベントリー)の作成にあり、そのための証拠標本です。

デジタルカメラで誰でも気軽に撮影できる時代になりましたが、写真では正確に種類を確定(同定)できない植物もあります。また、たとえ間違いがあっても標本があれば将来正しく同定し直すことができます。標本はその時点の自然の姿を閉じ込めたタイムカプセルであり、信頼できる植物相調査には標本の採集と博物館などでの保存が

不可欠なのです。もちろん、道立自然公園では動植物採集の原則禁止などさまざまな規制があります。当館の調査も例外ではなく、毎年いくつかの許可・承認手続きをして実施しています。

5年間の調査で採集できた種子植物は500種を越え、そのうち約90種が過去の調査では記録のなかった種でした。大正期から数回にわたって高名な植物学者が調査し、毎日多くの自然愛好家が訪れるこの森林公園で、これほどの初記録があるとは意外でした。

写真のヒメニラはその例です。ヒメニラは北海道では道南から道東まで広く分布しますが自生地は非常に局所的で、札幌周辺でも限られた地点でしか見つかっていません。野幌森林公園ではこれまで記録がなく、今回の調査であるひとつの谷だけで群落を発見しま

した。小さな花ですが、身近な自然にもまだ見過ごされている多様性が隠れていることを教えてくれます。

調査の成果は当館の研究紀要で報告したほか、企画テーマ展「野幌森林公園いきもの図鑑」でお披露目しました。

近年、博物館にとって地域社会との連携や市民参加が重要になっています。今回の植物相調査は、市民グループ「野幌森林公園調査の会」と自然ふれあい交流館と連携して実施しました。同会のメンバーは季節を変えて頻繁に園内各所を歩き、植物を探して採集し、粗々の同定および標本化作業までを手分けして行ってくれました。また、企画テーマ展についても、同会のメンバーに展示植物標本の選定や展示作業に参加していただき、当館として初めての道民参加型企画展となりました。



ヒメニラの標本

左上：企画テーマ展「野幌森林公園いきもの図鑑」での展示
左下：「調査の会」メンバーによる展示標本の選定

総合展示室の資料紹介/第3テーマ

冬山造材を支えた道具「サッテ」

青柳 かつら

研究部生活文化研究グループ 学芸主査

昔の北海道の林業では、「冬山造材」といって、冬に木材を伐り出していました。冬山造材は、寒さや作業できる昼間の短さ、積雪の分だけ樹木が雪に埋もれて伐り残しが生じてしまうなどの欠点がありました。その一方で、冬は樹木の成長が休みの時期で、材質の安定した木材が得られる、雪を利用すると道づくりが簡単で、馬そりで効率的に木材を運べる、冬は農閑期で、地元の農業者の労働力が確保しやすいなど、欠点を上回る利点がたくさんありました。冬山造材は、雪と寒さを活かそうとする人々の知恵に裏付けられたものでした。

図1の①に示したように、木を伐り倒す「伐木作業」には、大きく2つの

工程があります。まず＜受け口＞をつくります。木を倒す側の幹に、大きな斧「サッテ」を使って三角形に切込みを入れます。

次に反対側から＜追い口＞として、水平に鋸をひきます。ポイントは、受け口と追い口の間に切り残される部分＜ツル＞を作っておくことです。ツルがあることで、狙った方向にゆっくりと安全に木を倒すことができます。

明治時代、木を伐り倒す斧は薪割り斧に似た短冊形でした。大正時代から昭和初期にかけて、大きな木を効率よく伐り倒すため、刃を長く薄く、刃の長さ比べて切り口を狭くした大型の斧、サッテが使われるようになりました(写真1)。

そして、木を伐り倒す威力を高めるため、重量は3～4kgと重く、サッテを使った受け口切りの作業は重労働でした。造材に従事した労働者達は、山の中に作られた簡素な小屋である「飯場」に寝泊まりしました。伐木作業に当たった山子(杣夫)さんは、作業を終えて飯場に帰ってくると、刃こぼれを直し、切れ味を良くするために、毎晩時間をかけて丁寧にサッテの刃を研ぎました。学校を卒業したばかりの10代の少年が、夜遅くまでサッテ研ぎをすることもありました。

総合展示第3テーマ「山に生きる」では、冬山造材の様々な道具を見ることができます(写真2)。是非、このサッテに注目頂き、よく観察してみてください。

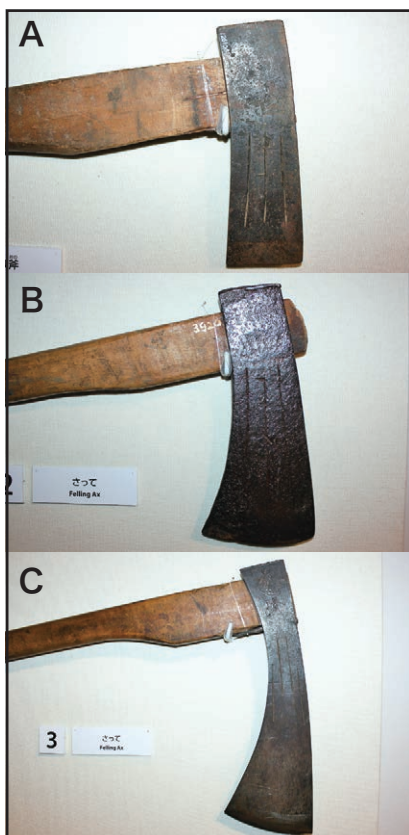


写真1 斧の形のいろいろ (部分)

- A 薪割り斧
 - B サッテ 刃が薪割り斧に似た古いタイプ
 - C サッテ 刃が長く薄い新しいタイプ
- いずれも当館所蔵



写真2 総合展示第3テーマ「山に生きる」コーナー

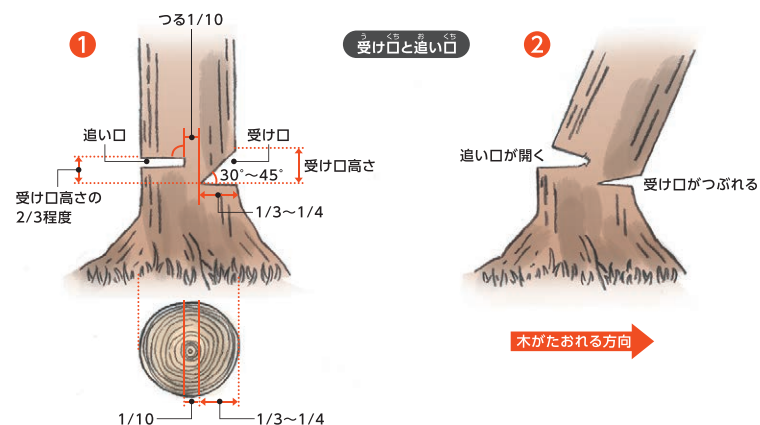


図1 伐木作業の手順 全国森林組合連合会ウェブ「伐倒作業の基本技術」(2015年)を参考に作成

研究活動紹介

もう一つの歴史・文化の道—北海道から千島列島、カムチャツカへ— 右代啓視

研究部歴史研究グループ 学芸主幹



学芸主幹 右代啓視

1959年、北海道生まれ。北見市郷土博物館、北海道開拓の村を経て1989年より北海道開拓記念館（現北海道博物館）学芸員。専門は考古学。写真は2014年色丹島イネモリシリの調査にて。

北海道を中心とした考古学の研究を進めると、そのアプローチは巨視的にアイヌ文化の研究につながっていきます。これまで考古学的な研究を進めるなかで、北海道の先史文化とは違うオホーツク文化を調べると、サハリンへ、さらには大陸へ広がる「北の道」がみえてきます。また、北海道の在地文化である擦文文化を調べると、本州の先史文化とつながる「南の道」がみえてきます。これは、太平洋の北西部に弧状に位置する日本、特に北に位置する北海道では、北と南の歴史・文化の道の影響を受け、時代ごとに文化的な連鎖がおき、地域で成熟した文化が展開してきたものと考えられます。北海道で成熟した先史文化は、北や南にも拡がりをみせますが、さほど大きな影響をもたらすものではありませんでした。しかしながら、もう一つの歴史・文化

の道、北海道から千島列島、カムチャツカへつうじる「東の道」は、北や南からの歴史・文化が北海道で成熟し拡がり、その地域に根ざしながら展開したものと考えられます。



この「東の道」の入口となる北方四島では、7,000年ごろ北から北海道に石器づくりの技術が伝わった「石刃鏃」の文化、4,000年ごろ南からの影響を受け北海道で拡がった「北筒式土器」の文化、2,500年ごろ北海道東部に文化圏を持つ「幣舞式土器」の文化など、縄文時代で成熟した先史文化が拡がっています。2,000年ごろからはじまる続縄文文化では、北海道東部に文化圏を持つ「下田ノ沢式土器」の文化、後の3～4世紀には「後北式土器」の文化がみられ、成熟期の文化が拡がっています。また、5～9世紀に北海道のオ

ホーツク海沿岸域に文化圏を持つ「オホーツク文化」、10～12世紀になるとトビニタイ土器を使用する人々、擦文土器を使用する人々が文化圏を拡げます。さらに、17～18世紀のアイヌ文化では、アイヌの砦、城とされるチャシが多く築造され（写真1）、北千島まで拡がります。また、このころ使用された「内耳土器」はカムチャツカ半島の南端まで拡がっており、アイヌ文化研究につながっていきます。

この現象は興味深いことであり、これらの背景には大陸あるいは本州からの先史文化の影響、さらに封建的国家の成立にともなう社会構造の変化などがあり、地域社会の文化的構造にその影響をおよぼし成熟した現象として現れたものと考えられます。これらの文化の成熟期は、縄文海進期、縄文後期海進期など過去の温暖の影響下にあったことも示唆されます。



このように、もう一つの歴史・文化、「東の道」を探るため、千島列島からカムチャツカを視野に入れた「北方四島の歴史・文化の研究」を進めてきました。先に述べたのは、その成果の一部であり、この他にも多くのことがわかってきました。2006年（平成18）にビザなし交流で訪問して以来、毎年「歴史・文化の学術交流」として国後島（8回）、色丹島（3回）、択捉島（3回）に訪問し、早くも13年を数えるようになりました（写真2・3）。

この研究を進めるうえで障壁となっていることは、北方四島が日本の領土であって、ロシアの実効支配下におかれている地域であるということです。このことから内閣府や外務省、北方四島関係団体、さらには現地での受入機関（ロシア側）など、多くの方々の協力がなければ現地調査が実現できない地域でもあります。戦後、専門家が約60年間、立入ることができなかった地域



写真2 岩面刻画の調査を終えて（国後島古釜布 2016）

写真1 色丹島マス場
チャシの調査 (2013)



であり、歴史・文化研究だけではなく、多くの研究分野で空白となっていました。先に示した成果は、北海道からカムチャツカにいたる北方四島と千島列島の考古学的な歴史・文化構造を解明することにあります。この人類活動史の研究では、第一に先史時代における物質文化的連鎖現象、第二に先史時代から歴史時代における文化接触と文化拡散、第三に狩猟採集社会の持続可能な環境と資源などの解明に大きな主眼をおき進めてきました。

この13年間継続してきたこの学術交流では、北海道あるいは日本の歴史文化の認識を北方四島に在住しているロシアの専門家とともに深めることができたこと、さらには史跡、遺跡などの文化財あるいは文化遺産の保存・保護のあり方、地域博物館のあり方などを共同で調査したことにあります。この学術交流の成果として、国後島では学校教育の現場で北海道や日本の歴史・文化を紹介する授業や遺跡の草刈りなど子供たちが中心となって実施されたことです。また、リニューアルされた国後島古釜布郷土博物館では、2018年に子ども参加の「郷土史クラブ」が再結成され、我々の訪問に合わせて先史文化や北海道の歴史文化などのワークショップを開催しました。択捉島では択捉島紗那郷土博物館と同図書館が企画し、子どもたちの郷土史の学習として「先史文化探検隊」が2017年に結成されました。我々とともに現地で発見した遺跡を教材として、択捉島の先史文化の現地学習が行われています。これは、学術交流の大きな成果の一つです。



このように学術交流や研究活動は成果をあげており、意識的に継続しなくてはならないものであり、新たな交流や研究のあり方を考えなければならない時期になってきております。我々の北方四島への訪問回数が増えるたび、元島民の方や在住するロシアの方々との交流や友好的な関係が構築されてきました。元島民の方々はもとより、現地のロシアの方々の多くの声として、江戸時代の千島列島史、特に北方四島史についてはどうなっているのか、また明治から昭和20年までの北方四島の歴史・文化の現地調査とその記録を残してもらえないかなど、多くの要望や質問が寄せられるようになってきています。特に元島民の方からは、日本が建築した現存する建造物や基礎、石碑、確認できていない墓地や墓石など、正確な記録を残してほしいとの要望があります。また、元島民の方は、高齢なので自分が現地には行けないので代わりに調べてもらうことはできないのかと、さまざまなことが求められるようになってきました。



このことから、もう一つの歴史・文化の「東の道」を探るため、先史時代、

江戸時代、明治～昭和の時代、さらに現在までの三つの時期を研究の視点に加え、その入口にある北方四島の現地調査を学術的に進めていく計画を進めようとしております。すべて満たすためには、相当な時間や経費が必要なので、できるところから進めようと考えております。また、現在、北方四島の国後、色丹、択捉島では、これまでにない速さで学校、文化施設、住宅の建設、空港や道路の整備などの開発が進められております。北方四島のロシア側では、日口間の経済交流の一環として、現地では文化財、文化遺産を観光資源に活用したいとの意見もだされています。



今後の歴史・文化の学術交流は、北方四島の過去と現在の歴史・文化を検証し、未来に文化遺産として何を伝えるべきか、日口間の領土問題の枠組みを超えた人類の文化遺産の継承のあり方を考えていくべきであると私は考えております。この歴史・文化の学術交流をつうじ近い将来に向けた領土問題の解決につながることを願い、もう一つの「東の道」の研究を進展させたいものです。



写真3 古釜布南砂丘遺跡の調査 (2018)

トピックス

はっけん広場のイベントで、秋を満喫！

森林公園内の木々も色づき始める頃、はっけん広場では秋のイベントとして落ち葉形のバッチをつくる、「羊毛で落ち葉っち！」を開催しました。葉っぱの型に、赤、黄色、オレンジ色といった、紅葉の色合いに染色した羊毛を、少しずつ伸ばしながら巻いていきます。

巻くときに羊毛にねじりを加え、毛糸状にして「葉脈」を表現するのがポ

イントです。後はひたすら「ぐるぐる、ねじねじ、ぐるぐる、ねじねじ…」と羊毛を粘り強く巻いていきます。

最後まで巻いたら、残りの羊毛にさらに強いねじりをかけて「葉軸」を作り、安全ピンをつけて完成です。

このイベントでは、「羊毛を巻くだけでしょ？？」とお子さんが苦戦している姿を見て、お母さんが参戦する姿もありました。簡単に見えた「羊毛を

ねじって巻く」という工程が意外に難しく、お手伝いが本気モードへ変わります。子供だけでなく、大人も真剣に参加する姿が見られました。できあがったバッチも、羊毛のふわふわ感たっぷりの葉っぱやキリリと尖った葉っぱなど、大きさも形も人それぞれで、とっても個性的でした。色とりどりの紅葉が舞い散るイベントとなりました。（解説員 折館里佳）



お母さんの応援に励まされて頑張っています



お気に入りの素敵なバッチが完成！

ロシア、カナダの博物館との交流事業が進行中です

北海道は、カナダ・アルバータ州とは1980年に、ロシア・サハリン州とは1998年に姉妹提携を調印して以来、さまざまな交流を行ってきました。ここでは、最近の北海道博物館とこれら姉妹州の博物館との交流事業の話題を紹介します。

○ロシア・サハリン州郷土博物館研究者との研究交流（写真1）

7月26日（木）～8月9日（木）、同館より、ゲナンジー・マチュシコフ氏（専門：動物相、古生物）と、ヴィクトリア・ドゥビニーナ氏（専門：昆虫）が来道しました。期間中は、当館職員とともに、釧路、根室、遠軽町丸瀬布などに道東の地域博物館、湿原や湖沼、山林を訪れ、収蔵資料調査、鳥や昆虫の生態調査などを行いました。事業を通じて、両館の職員相互が知見の共有や

意見交換を行い、実りの多い時間を過ごすことができました。

○カナダ・ロイヤル・アルバータ博物館との調印式（写真2）

8月2日（日）、同館よりオルウィン・ボードウェン氏が来道し、北海道博物館と同館の友好館と共同研究に関する覚書の調印式を行いました。この覚書をふまえ、2018年からの5年間、「北方地域」という類似性を持つ、両地域の自然、歴史、文化、博物館を切り口に、新たな共同研究を行う予定です。

（学芸主査 青柳かつら）



写真1 丸瀬布での共同調査 マチュシコフ氏（最左）、ドゥビニーナ氏（左から2番目）

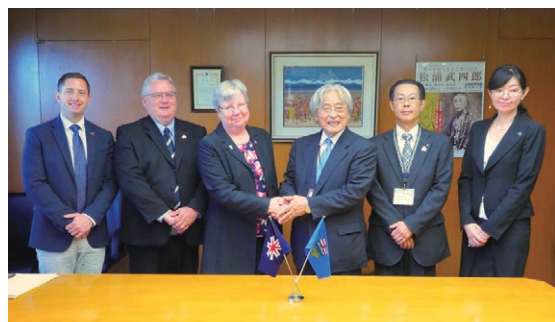


写真2 調印式 中央がボードウェン氏と当館館長

アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソシ』増刷します



当館アイヌ民族文化研究センターが編集・発行している、アイヌ文化を紹介する小冊子『ボン カンピソシ』。

第1巻「イタク はなす」(アイヌ語)から第9巻「地名」まで、各巻ごとにテーマを定め、A5判32ページの冊子にまとめたものです。

これまで、道内の各学校や道内外の図書館などに送付するほか、学習・研究のため希望する方々に配布してきました。お陰様で、たいていの巻は幾度か増刷を重ねてきたのですが、それでも品切れ状態になってしまう巻が続出。今年度に入ってから、5巻以降は

在庫がない状態が続いていました。

このほど、9巻全てを増刷できるようになりました。この機会に、特に近年の動きについて補訂を行うなど、少しだけですが、学習のための情報の“アップデート”も進めています。

2019年3月には発行予定。誌面は当

館のウェブサイトにも掲載する予定です。あとしばらくお待ちください。

(アイヌ民族文化研究センター長 小川正人)

アイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソシ』全9巻

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 はなす (アイヌ語) | 6 口頭文芸 (口承文芸) |
| 2 着る (衣服) | 7 芸能 |
| 3 食べる (食事) | 8 民具 |
| 4 住まい | 9 地名 |
| 5 祈る (信仰) | |

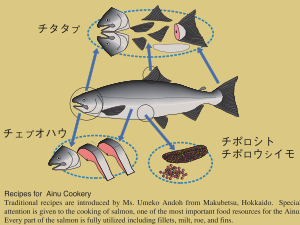
小冊子の誌面から

料理の作り方

幕別町在住の安東ウメ子さんに昔ながらの料理の作り方を教えていただきました。アイヌにとって重要な食料の1つであるサケを使った料理を中心に紹介いたします。身はもちろん、白子や脂子、ヒレまでも余すところなく利用しました。

サケの身おろしの順番

全体に塩をまぶし、ぬめりをとる。頭を3枚におろして、しばらくの間水の中にとり、腹に包丁を入れ、はらわたをとる。ヒレを落とす。イタラの状態にする。

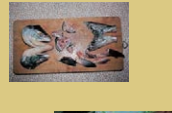


チタツ

材料：サケの白子、尾、ヒレ、腹、水、白子、黒ネギ



背ヒレ、尾ヒレ、腹ヒレ、水漬を塩でゆめりをとる。それらを包丁で細かくするまで刻み、そこに白子と黒ネギを混ぜる。油で揚げ、黒ネギをのせて食べる。



「チセ」ということばについて

アイヌ語では、「家屋」のことを「チセ」といいます。このことばは、だいたいの方言でも用いられてきました。

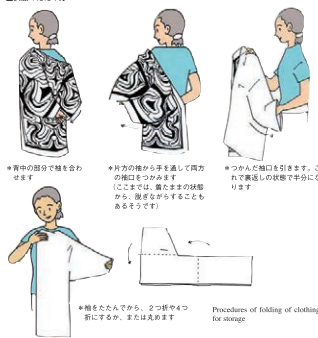
この「チセ」ということばは、これまでしばしば、とくに日本語の文章に取り入れられた場合に、かつてのカヤやササなどで葺いた家屋だけを指して使われることがありました。たとえば「今やチセに住んでいる人はいない」というような表現が、「今やカヤで葺いた家に住んでいる人はいない」というような意味で使われることがありました。しかしアイヌ語として考えた場合には、現代の新しい工法による家も、やはり「チセ」と表現することになります。じっさい、お年寄りにアイヌ語で会話をしていた中に、現代の家屋を指して「チセ」ということばが用いられている例があります。材料や工法が変わっても、アイヌ語にとって「チセ」つまり「家屋」に変わりはないのです。

▲ 幕別町にお住まいだった安東ウメ子さんによる伝統料理。実際に作っていただき、その様子を紹介しています。(「3 食べる」より)

▲ アイヌ文化の理解にとって大事なポイントにはコラムなどで触れています。要点の英訳もあります。(「4 住まい」より：「チセ」という言葉についての説明)

では次に、衣服のたたみ方です。これは、衣服の種類はもちろん、地域ごとにも、それぞれの人によっても違っていたようですが、一例として、釧路市の織田ステノさん(1902～1992年)の表面表のたたみ方を紹介します。

■衣服のたたみ方



2 文様を施す

衣服などに施した幾何学的文様は、布を切って表地に付けたり、刺しゅうをしたりして作ります。こうして作られる文様にも、地域ごとに特徴があります。刺しゅうの文様には縫い付けの文様があると言われますが、表地のところは地域や人によって様々です。着ることをよく知っているお年寄りの話でも、文様の刺しゅうの縫い付けの文様があるという人もいます。文様には特にそのような意味はないという人もいます。



Patterns-Motifs Patterns on the clothes, which are characteristic of the area of origin are made by patchwork and embroideries.

▲ 衣服に関する冊子ではこんな情報も。着物のたたみ方(左側のページ)や着物などに施す文様について説明しています。(「2 着る」より)

●カタカナ表記とローマ字の簡易音素表記

*母音で終わる音

ア	a	イ	i	ウ	u	エ	e	オ	o
カ	ka	キ	ki	ク	ku	ケ	ke	コ	ko
サ	sa	シ	si	ス	su	セ	se	ソ	so
タ	ta			トゥ	tu	テ	te	ト	to
チャ	ca	チ	ci	チュ	cu	チェ	ce	チョ	co
ナ	na	ニ	ni	ヌ	nu	ネ	ne	ノ	no
ハ	ha	ヒ	hi	フ	fu	ヘ	he	ホ	ho
パ	pa	ピ	pi	プ	pu	ペ	pe	ポ	po
マ	ma	ミ	mi	ム	mu	メ	me	モ	mo
ヤ	ya			ユ	yu	イェ	ye	ヨ	yo
ラ	ra	リ	ri	ル	ru	レ	re	ロ	ro
ワ	wa					ウェ	we	ウォ	wo

*後ろに母音が続かない音

プ	p	ツ	t	ク	k	ム	m	ン	n
シ	s	ラ	ri	ル	ru	レ	re	ロ	ro

— (音を出さない区切りの印)

◀ さて、よくご質問いただくのが「この『ボンカンピソシ』って?」。その答えも、この小冊子をざらぐださい! (「1 はなす」より)

ボン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

活動ダイアリー

2018年9月～11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月1日(土)

■はっけんイベント「羊毛で落ち葉っち！」が開幕。
(～11月25日の土日祝振)



9月6日(木)～8日(土)

■台風21号および北海道胆振東部地震の影響により、臨時休館。

9月8日(土)

■台風・地震の影響により、ちゃれんが子どもクラブ「アイヌ音楽 うたおう・おどろう・ならそう・ひこう」を中止。

9月9日(日)

■台風・地震の影響により、ミュージアムカレッジ「北蝦夷地ウシヨロ場所物語」を中止。

9月15日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①～②を展示入替。

①古文書を読む／新着資料 フラージュ家古文書



②北海道の双六あれこれ



■ちゃれんが子どもクラブ「アンモナイトを解剖しよう」を開催。担当：栗原憲一・圓谷昂史。

9月17日(月・祝)

■ハンズオン「蓄音機で音楽を聞いてみよう」を開催。

■ミュージアムトーク

「なぜ、アンモナイトは世界中から産出するの？」を開催。担当：栗原憲一。



■屋上スカイビューを特別開放。



9月21日(金)

■第12回企画テーマ展「りんご農家の道具」が開幕。(～11月25日(日))



9月22日(土)

■アイヌ語講座「日常会話のリズムとイントネーションを中心に(全2回)」第1回を開催。担当：奥田純己。

9月23日(日・祝)

■ハンズオン「リンリン黒電話」を開催。

■ミュージアムトーク「展示場のトンコリを弾いてみよう」を開催。担当：甲地利恵。

■屋上スカイビューを特別開放。

9月24日(月・振)

■ハンズオン「石器にさわってみよう」を開催。

■ミュージアムトーク

「りんご農家で使われた道具のいろいろ」を開催。担当：山際秀紀。



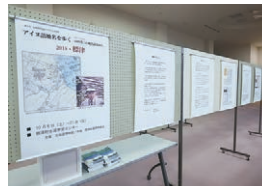
■屋上スカイビューを特別開放。

9月29日(土)

■アイヌ語講座「日常会話のリズムとイントネーションを中心に(全2回)」第2回を開催。担当：奥田純己。

10月6日(土)

■第5回アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩くー山田秀三の地名研究からー2018標津」が開幕。(会場：標津町生涯学習センター。～10月21日(日))



■ちゃれんが子どもクラブ「やってみよう、ステンシル！」を開催。担当：会田理人・山際秀紀。

10月7日(日)

■ミュージアムカレッジ「囚人が逃げた！ー明治期の集治監関係の文書から」を開催。担当：山田伸一。

10月10日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：甲地利恵・山際秀紀。

10月13日(土)

■アイヌ語講座「はじめてからのアイヌ語講座(全3回)」第1回を開催。担当：田村雅史。

10月20日(土)

■自然観察会「落ち葉でPON！」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表深太・高橋治貴・濱本真琴(自然ふれあい交流館)。

10月21日(日)

■古文書講座「ゆとり古文書講座(全3回)レベル3」第1回を開催。担当：東俊佑。

■古文書講座「はじめての古文書講座(全3回)レベル1」第1回を開催。担当：東俊佑。

10月28日(日)

■北のミュージアム活性化実行委員会主催「体験型イベント 北のみゆげふえす」を共催。

10月31日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：表深太・杉山智昭。

11月3日(土・祝)

■特別イベント「ミュージアムコンサート アイヌ音楽ライブ」開催。演者：MAREWREW(マレウレウ)。



■文化の日講演会「近世初期における日本人の地理認識の転換」を開催。講師：藤井譲治氏(京都大学名誉教授)。



11月4日(日)

■ミュージアムカレッジ「博物館の産業資料を読む」を開催。担当：会田理人・山際秀紀。

11月10日(土)

■アイヌ語講座「はじめてからのアイヌ語講座(全3回)」第2回を開催。担当：田村雅史。

11月17日(日)

■公開講座「シンポジウム 北方四島の過去と現在・未来に何を伝えるかー歴史・文化遺産を伝えるー」を開催。発表者：右代啓視・鈴木琢也ほか外部有識者。(会場：釧路市立博物館)

11月18日(日)

■古文書講座「ゆとり古文書講座(全3回)レベル3」第2回を開催。担当：東俊佑。

■古文書講座「はじめての古文書講座(全3回)レベル1」第2回を開催。担当：東俊佑。

11月19日(月)

■慰霊行事(イチャルパ)を実施。

11月23日(金)

■NE X CO東日本北海道支社主催「北海道スマホスタンプラリー」にスタンプ押印スポットとして参加。(～2019年4月2日(火))

11月24日(土)

■北海道民族学会2018年度第2回研究会を共催。

11月25日(日)

■ちゃれんがワークショップ「稲わらで縄をつくて、長なわとびに挑戦！」を開催。担当：池田貴夫・舟山直治。

11月28日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：大坂拓・東俊佑。

人事異動

新任(12月1日付) 学芸部道民サービスグループ兼研究部歴史研究グループ学芸員：田中祐未

来館者数

○2018年9月～11月

総合展示室 25,464人 特別展示室 10,085人 はっけん広場 7,038人

○累計(2015年4月～2018年11月)

総合展示室 419,194人 特別展示室 304,231人 はっけん広場 99,291人

森のちゃれんがニュース 第14号

発行日：2018年12月28日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2018